



TITLE:

京大広報 No. 640

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

---

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 640. 京大広報 2008, 640: 2777-2802

ISSUE DATE:

2008-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196446>

RIGHT:



# 京大広報

No. 640

2008.12



「京都大学稲盛財団記念館」竣工披露会  
—関連記事 本文2780ページ—

## 目次

理事就任のご挨拶 財務・産官学連携担当理事・副学長 塩田 浩平	益川敏英名誉教授、伊藤 清名誉教授が 文化勲章を受章……………2788
……………2778	西田龍雄名誉教授、長尾 真名誉教授 (元総長)が文化功労者に選ばれる……………2789
〈大学の動き〉	〈日誌〉……………2791
平成21年度大学入学者選抜大学入試センター 試験の実施……………2780	〈話題〉
「京都大学稲盛財団記念館」竣工披露会を举行 ……………2780	京都大学、ミシガン大学、フライブルグ大学による MicROアライアンス会議を開催……………2792
京都大学稲盛財団記念館竣工記念京都賞 シンポジウムを開催……………2781	宇治キャンパス公開2008を開催……………2792
名誉教授称号授与式……………2782	JSPS-MOE 拠点大学交流事業「都市環境」 日中合同会議を開催……………2793
国立大学法人京都大学の新組織体制について 総長室長 小寺秀俊……………2782	国際交流会館修学院本館「入居者懇親会」を開催 ……………2794
〈部局の動き〉	原子炉実験所「アトムサイエンスフェア2008」を 開催……………2794
再生医科学研究所が共同利用・共同研究拠点に 認定……………2783	宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催……………2795
〈寸言〉	地域交流事業「伝統の出会い」を開催……………2795
大学で身につけたこと 菅田史朗……………2784	宇治キャンパスで消防訓練を実施……………2796
〈随想〉	国際交流会館おうばく分館で消防訓練、 安全講話を実施……………2796
歴史の「言葉」を洗いながら 名誉教授 佐々木克……………2785	〈訃報〉……………2797
〈洛書〉	〈お知らせ〉
インドネシアおたく 岡本正明……………2786	第12回リカレント教育講座『心の教育』を考える 「個のあり方を大事にする関わりー」……………2799
〈栄誉〉	〈隔地施設紹介〉
松本 紘総長が長谷川・永田賞を受賞……………2787	防災研究所附属地震予知研究センター 逢坂山観測所……………2800
齋藤 烈京都大学名誉教授が 2008年APA Awardを受賞……………2787	

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 理事就任のご挨拶

財務・産官学連携担当理事・副学長 塩田 浩平

平成20年10月1日付けで京都大学理事・副学長に就任いたしました。松本 紘総長のもとで、京都大学のために微力を尽くしたいと気持ちを新たにしております。ここに京都大学関係者の皆様にご挨拶申し上げます。

京都大学は111年間の歴史の中で、多くのすぐれた人材を輩出し、高等教育やそれぞれの学問分野をリードしてきました。連綿と流れる自由の学風のもとで、真理の探究、卓越した知の創造が追求され、わが国のみならず世界の中で最も大学らしい大学の一つとしての評価を得ています。この精神は、本学の基本理念の中に「自由の学風を継承し、発展させつつ、多面的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」と明示されています。このような誇るべき伝統を継承してさらなる発展を目指すとともに、内外の激しい変化の中で時代の新しい要請に応えるという使命も果たしていかななくてはなりません。困難な時代ですが、これまでの歴史を振り返り次の100年に向けての礎を築くべき重要な時期でもあると思います。

私はこれまで医学研究科において、解剖学・発生学領域の教育研究に従事し、同僚や共同研究者と行う研究や国内外の研究者との交流を楽しんできました。たまたま平成13年度からの3年間、長尾 真総長のもとで総長補佐を務めさせていただいたことにより、大学全体を見渡す機会を得、学内外の多くの方々と知り合うことができました。京都大学の中にはユニークで多様な学問と文化、様々な個性とすばらしい能力を持った教員や職員が多いことを改めて実感しました。平成19年度からは医学研究科長として部局の責任者の立場にありましたが、このたび松本総長から理事・副学長に任ぜられ、新たな責務を担うことになった次第です。



私は理事として、財務と産官学連携を主たる担当として命ぜられております。これらの事項は、これから京都大学が発展していくためにきわめて重要なものです。大学運営の基

本的な方針については、松本総長が京大広報10月号(No.638)に書いておられますので、ここでは私が担当する財務と産官学連携に関して、現状と課題を理事の立場から述べさせていただきます。

### 財務について

京都大学は、総額約1,400億円の資金によって運営されていますが、その約半分が国からの運営費交付金でまかなわれ、残りが授業料や附属病院収入などの自己収入、科学研究費補助金やその他の競争的資金、共同研究・受託研究などの外部資金によっています。このうち、運営費交付金には効率化係数がかかり年1%ずつ、附属病院収入は経営改善係数という形で年2%ずつ削減されてきています。これは大学の運営にとって大きな影響がある数字で、本学の場合、毎年10億円ずつ国からの収入が減っている計算になります。こうした事態は教育研究活動を直接圧迫しかねませんが、前執行部は資金運用によって自己収入の増収をはかり、各部局・分野への配分額の減少を回避されました。平成22年度からの第2期における運営費交付金についての国の方針はまだ明らかではありませんが、あらゆる手段を講じて京都大学の財政基盤を安定させ、教育・研究・診療の質を向上させていく必要があります。引き続き予算の公正かつ効率的な執行に努めるとともに、概算要求によって特別教育研究経費の充実をはかり、さら

に京都大学の強みを活かせる各種の競争的資金を多く獲得できるよう、大学として最大限の努力を続けていく所存です。

前執行部から引き継いだ事業として「重点事業アクションプラン2006-2009」があります。これは、目的積立金と重点戦略経費を用いて、全学的かつ中長期的な視点から教育、研究、診療、広報・社会連携、基盤整備を重点的に推進するための事業を行う計画です。このアクションプランはこれまで順調に実施されてきていますが、平成21年度中にできるだけ多くの事業を実現できるよう、目を配っていききたいと思います。

京都大学の財務状況については、担当の松本理事(現総長)のもとで『財務報告書 Financial Report 2008』としてまとめられました。大学の収入と支出、各種経費の割合や年次推移などがわかりやすくまとめられていますので、ぜひご覧いただき、京都大学の財務状況の概要をご理解いただきたいと思います。

京都大学は、松本総長が所信で述べられているような様々な計画をこれから実行していきますが、その目的は、次代を担う有為の学生を育て、すぐれた研究・診療を行って、京都大学が社会的な責任を果たしていくことです。そのために、学生、教員、職員がそれぞれの立場で気持ちよく学業、研究や職務に打ち込める良好な環境と体制を整えるよう、財務面からも一段の努力をしたいと考えています。

### 産官学連携について

京都大学では、それぞれの研究分野で活発な研究が行われ、ユニークですぐれた成果が得られています。その中には、情報発信や技術移転をすることによって、大学で生み出された知的資産が社会で活用され、技術や産業の発展に貢献できるものも少なくありません。そのために、研究に打ち込んでおられる研究者に対して、その知的財産を様々な形で活用できるよう側面から支援する体制が必要です。京都

大学では、産官学連携を推進して社会におけるイノベーション創出と知的創造サイクルの活性化に貢献することを目指して「京都大学産官学連携ポリシー」を定めています。

こうした活動を積極的に推進するため、本学では2007年に産官学連携体制を整備し、産官学連携本部とそのもとに産官学連携センターにおいて、全学の産官学連携活動を集約的に推進することが可能になりました。産官学連携センターには「メディカル・バイオ(生命科学)分野」「理工農学分野」「ソフトウェア・コンテンツ分野」「iPS細胞研究知財支援特別分野」の4分野が置かれ、各キャンパス、理系・文系の広い領域をカバーする支援体制が整っています。産官学連携センターのスタッフが学内研究者の知的財産の権利確保と活用、産官学連携やベンチャー起業などを支援していますので、積極的にご相談いただきたいと思います。

平成16年度の国立大学法人化から4年が経過しましたが、6年ごとの中期の第1期が21年度末で終了し、そのあと新たな第2期に入ります。これまでは法人化に伴う試行錯誤の過程でもあり、大学人すべてが新しいシステムの構築、競争的資金の獲得、様々な評価への対応などに多くのエネルギーを割かざるを得ない状況が続いてきました。この第1期の経験をもとに、これからは大学本来の目的と使命を再確認し、京都大学らしい「オンリーワン」の個性を追求するとともに、世界に冠たる大学としてグローバルに発展していかなければなりません。学生と教員・研究者のためによりよい教育研究環境を整え、大学内の体制を整備してスムーズな運営に務めることが大学執行部の責任であると考えています。松本総長のリーダーシップのもと、他の理事・副学長および職員、各部局の教員の方々と協力して、京都大学のさらなる発展のために努力する所存です。ご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。



## 大学の動き

### 平成21年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成21年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成21年1月17日(土)及び18日(日)の両日に実施される。このため、本学では1月16日(金)の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

#### 1. 期日及び試験教科

1月17日(土)

公民、地理歴史、国語、外国語、英語リスニング

1月18日(日)

理科①、数学①、数学②、理科②、理科③

#### 2. 試験場(実施担当学部)及び受験者数

本部第1試験場(文学部)

本部第2試験場(医学部)

本部第3試験場(法学部)

吉田南試験場(理学部・総合人間学部)

受験者数 1,790人

(学生部)

### 「京都大学稲盛財団記念館」竣工披露会を挙げる

10月31日(金)、「京都大学稲盛財団記念館」の完成を記念して、竣工披露会が行われた。

同記念館は、本学が我が国を代表する学問の府として、地域社会はもとより、国際社会において21世紀の更なる学術・文化の発展に貢献していくため、財団法人稲盛財団(稲盛和夫理事長)より寄贈されたもので、鴨川の東に面した吉田キャンパス川端近衛南東角に建設された。

同記念館へは、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、地域研究統合情報セン

ター、こころの未来研究センター及びアフリカ地域研究資料センターの5部局が入居する。また、1階部分には、京都賞に関する情報を広く紹介するための「京都賞ライブラリー」や、本学が保有する貴重な教育・研究活動の資料がデジタル化され閲覧することができる「研究資源アーカイブ映像ステーション」を設置し、11月1日より一般に開放されている(火曜～土曜の10時～16時まで開館、入場無料)。

竣工披露会は、稲盛和夫稲盛財団理事長をはじめ、坂田東一文科科学省文部科学審議官、山田啓二京都府知事、門川大作京都市長、尾池和夫前総長、松本紘総長及び吉川左紀子こころの未来研究センター長によるテープカットで始まり、星川茂一京都市副市長や、研究資源アーカイブ映像ステーションで研究資料が公開されている石井米雄京都大学名誉教授など、約180名が出席した。披露会では、松本総長、稲盛理事長による挨拶に続き、坂田文部科学審議官から祝辞が述べられた。その後、松本総長から稲盛理事長へ感謝状が贈呈され、尾池前総長の発声で乾杯を行い、新たなスタートを切った「京都大学稲盛財団記念館」の発展を盛大に祈念した。



施設を見学する  
松本総長(左)と稲盛理事長(右)



京都大学稲盛財団記念館全景

(企画部)

## 京都大学稲盛財団記念館竣工記念京都賞シンポジウムを開催

財団法人稲盛財団及び京都大学は、11月16日(日)、京都大学稲盛財団記念館において、「京都賞シンポジウム～知とこころの調和が未来をひらく～」を開催した。

京都賞は、科学・文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しい貢献をした人々に対して財団法人稲盛財団より贈られるもので、第24回目の今回は、先端技術部門の「情報科学」分野から、リチャード・M・カープ博士(アメリカ)、基礎科学部門の「生命科学(分子生物学・細胞生物学・神経生物学)」分野から、アンソニー・J・ポーソン博士(カナダ・イギリス)、思想・芸術部門の「思想・倫理」分野から、チャールズ・M・テイラー博士(カナダ)が選ばれた。

今回の京都賞シンポジウムは、10月31日の同館の

竣工を記念して、同記念館3階稲盛記念ホールにて行われたもので、招待客を含めて約140名の参加があった。

シンポジウムは、稲盛和夫稲盛財団理事長の開会挨拶に続き、井村裕夫稲盛財団会長(本学元総長)による基調講演、並びにパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションは、コーディネーターに第24回京都賞思想・芸術部門審査委員会委員長である川勝平太静岡文化芸術大学学長、パネリストに第24回京都賞受賞者3名及び京都賞委員会委員長である甘利俊一理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問を招き行われた。

シンポジウムの最後に、藤井信孝研究・国際(研究)担当理事・副学長による閉会の挨拶があり、京都賞受賞者や記念館を寄贈いただいた稲盛理事長への謝辞等が述べられ閉会した。

なお、シンポジウムにおいては、同時通訳があり、また、NHKによる番組収録が行われた。

(企画部)



パネルディスカッションの様子

閉会の挨拶を行う  
藤井理事・副学長



## 名誉教授称号授与式

10月17日(金)総長応接室において、塩田浩平理事・副学長(前医学研究科長)、小林慎太郎地球環境学学長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行政され、



名誉教授の称号を授与される北元教授

松本 紘総長から北 徹元教授(医学研究科)、嘉門雅史元教授(地球環境学学)に京都大学名誉教授称号が授与された。



名誉教授の称号を授与される嘉門元教授

(総務部)

## 国立大学法人京都大学の新組織体制について

前号の「大学の動き」欄で、「新管理運営機構及び副理事、理事補の任命について」として11月1日からの新たな体制をご報告しましたが、このたび、小寺秀俊総長室長から具体的な説明をいただきました。

総長室長 小寺 秀俊

10月1日に就任された松本 紘総長の強力なリーダーシップのもと、11月1日より図に示すような運営組織が発足しました。

総長の就任挨拶にもありますように、平成16年度の国立大学法人化以降、京都大学は国立大学時代とは異なる新たな制度や環境変化への対応を求められています。その対応を効果的に行えるよう、総長や理事の補佐として副理事、理事補が置かれ、さらに総長室および外部戦略室が設置されました。

本稿は、これらの副理事、理事補、総長室、外部戦略室の役割を簡単に説明するものです。

今回行われた運営組織体制拡充の基本は、本学が抱えている重要課題や新たな課題について、従来にも増して部局の実情等を踏まえつつ、ユニークなアイデアを全学から聴取し、迅速かつ的確に対応できるよう必要な補佐体制の充実を図り、情報を速やか

に収集・共有・発信できる仕組みを構築するというものです。

そのため、従来の副学長に加えて、総長と理事を補佐し、大学運営にかかわる新たな職として、副理事、理事補が設けられました。

副理事は、総長の定めるところにより全学的な業務を掌理する職として置かれ、具体的には、機構長、産官学連携本部長等が副理事となり、理事と情報を共有し、全学的視点を踏まえつつ、機構長等の日々の業務を行うとともに、理事が担う大学運営全般の業務についても関連性のある部分について支援等を行うことになっています。また、従来からの桂キャンパス担当に加え、宇治キャンパスと遠隔キャンパスについても担当を置くとともに、病院経営という大学財務と密接に関わる事項についても、副理事という立場で掌理することになりました。

理事補は、理事の担当事項のうちから、特に補佐を必要とする事項について、理事を企画立案、連絡調整面において補佐するための職です。

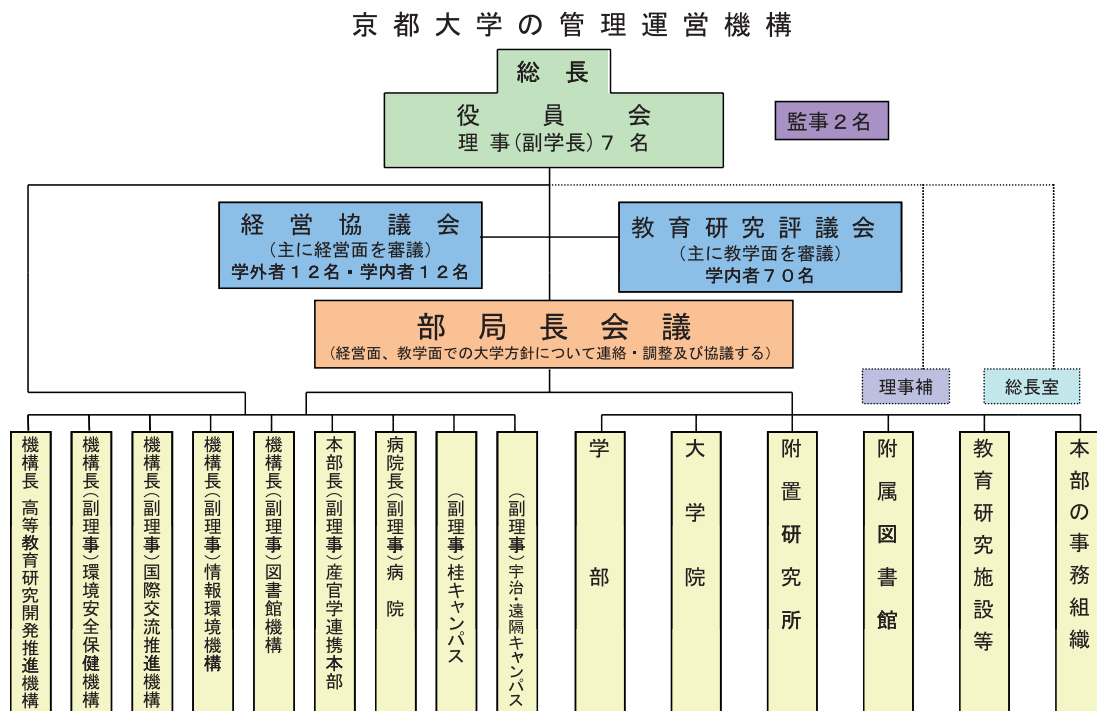
総長室は、総長の業務を支援するための組織であり、様々な検討事項に関して総合的かつ長期的観点から必要な調査研究を行い、総長に提言すること、総長が行う対外的な活動に関する企画立案、連絡調

整を行います。この総長室は教員と職員により構成され、それらの円滑な協業により業務を推進していきます。

さらに、この度、外部戦略担当の理事が置かれたことにより、この理事のもとで企画立案を行う組織として、外部戦略室が設置されました。この新たな組織は、内外から本学へ寄せられる様々な要求に迅

速かつ的確に対応するため設けられたものであり、それ自身が独立して動くのではなく、常に既存の他の組織と情報を共有しながら連携して適切な対応を行うことを目指しています。

以上のような新たな組織運営によって松本総長のリーダーシップのもと、魅力・活力・実力ある京都大学を目指して努力して参ります。



## 部局の動き

### 再生医科学研究所が共同利用・共同研究拠点に認定

再生医科学研究所が文部科学大臣から共同利用・共同研究拠点に認定され、10月16日(木)企画・評価担当理事室において認定書の交付式が行われた。

この共同利用・共同研究拠点は、「再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点」として、研究所に集約された再生医学の知識・技術を基に、多様な先端的共同研究を推進するとともに、再生医学研究・再生医療を積極的、意欲的に担う研究者を教育・育成することを目的とするものである。

この拠点化により、全国的な再生医学の総括的研究、分野横断的・学際的研究の推進、さらに、再生医療の臨床応用に向けて、技術、マテリアルの全国的標準化に寄与することが期待される。

なお、認定の有効期間は平成20年10月1日から平成22年3月31日まで。



江崎信芳企画・評価担当理事・副学長から認定書の交付を受ける坂口志文所長(左)

(再生医科学研究所)



## 寸言

## 大学で身につけたこと

菅田 史朗



大学の目的を「研究」と「教育」とに大別すれば、私の場合は教育機関としての大学生生活を過ごさせて頂いた。専門分野で身につけたものの記憶はあまり無いが、その後の人生を歩むうえで、かなり影響を受けたことが二つある。物事の正否や善悪を決め付けず柔軟に考える習慣と、基礎体力である。

まず后者は、大学の4年間バドミントン部に所属し、じっくりスポーツをやった結果だ。私は小学生の頃、すぐに風邪を引き、給食も残しがちで、学校もよく休むひ弱な子供だった。高校にかけて休日など故郷神戸の裏山、六甲山系を一人でハイキングするようになって少し体力が付いてきたが、大学入学当時はまだ細くひょろひょろしていた。それが体育会系運動部に入り、週に3～4日じっくり筋力や持久力を強化したのだから、卒業する頃には足腰がすっかり鍛えられ、食事も人並みに取るなど体質的にも変わっていた。50才を超えた頃からバドミントンを再開し、今も月に何度かプレーするし、海外を含む出張で飛び回っても、あまり大きな疲労を感じないのは、大学時代にクラブ活動を通して身につけた基礎体力という財産のおかげだろう。

柔軟にものごとを考えることの必要性や、正解が一つだけではないことに気づいたのは、大学紛争の時。ある日いつものように校門まで行くと、机や看板で封鎖され、学生による講義ボイコットが行われていた。そこには大学当局や教授陣への批判が書き並べられており、大きな衝撃を受けたものである。これで「世の中の正解は必ずしも一つではないらしい」と感じ、「立場によって、正しいことは異なる」と気づいた。

それまで教科書に書かれていることや先生の話をして「正しいこと」として疑わなかった。学校での学習、とりわけ受験勉強は、試験問題作成者の意図、

つまり求められる正解をいち早く探り出し、記載することだった。それが学力のある部分、すなわち基礎知識や論理的に物事を考えること、またできるだけ自分の考えを正確に表現することなどを身につけるのに大きな力があつたことは確かだろう。だがその反面、思考方法が狭いものになってしまった可能性が高い。活動に深く関わった訳ではないが、大学紛争は精神面での大きな転機になった。

そのような経験を経て、いまメーカーで仕事をしている。小さなころから木工やプラモデルが好きで、大学生の頃まで趣味としていたアマチュア無線では、送信機や受信機が完成して交信ができれば一丁あがり、その後のチャット(おしゃべり)にはあまり興味が無かった。工学部に行こうかと迷ったが、より原理的な考え方を学べるだろうと理学部を選んだ。将来はメーカーで働きたいと思っていたし、「電気の次は光の時代」という思いを高校の頃から持っていたので、進路選択に当たっては「どの部署にいても光に関与できる」光の専門メーカーを探した。就職雑誌に掲載されていた2社のうち、会社も社長も若かったウシオ電機に惹かれて入社した。後にして思えば、創業8年、社員数300名程度のベンチャー企業だったのだが、当時とりたてて不安や疑問も抱かなかった。以来現在に至るまで、目の前の課題、与えられた職務に取り組んできた。思惑通りと言うべきか、ずっと「光」と結びついた仕事をしてきている。例外は1990年代はじめに代表幹事秘書として経済同友会に出向していた2年間で、その間は会社の業務と離れ、経済、政治、世界など、幅広く物を見る機会を得た、これまた貴重な経験だった。

若い方々へは、どんなきっかけでもかまわないので、出来るだけ早い時期に社会の中での自分の役割、立ち位置や目指すべき方向を決めて、あとはそれを継続し、深掘りすることをお勧めしている。それが周りの人と比べて、上手だったり、早く出来たりすることなら、また、それが好きなら、なお良いことは言うまでも無い。

(すがた しろ うシオ電機株式会社 代表取締役社長 昭和47年理学部卒)

## 随想

## 歴史の「言葉」を洗いながら

名誉教授 佐々木 克

今年の3月、歴史小説家の永井路子さんから、直木賞受賞以来、四十数年も史料を集め構想を練ったという新著『岩倉具視』を送っていただいた。2年前の拙著『岩倉具視』を参考にしたとの、お礼の言葉が添えられていた。ここで描かれたのは、通説にとらわれない生き活きとした新鮮な岩倉像であり、見事な作品となっている。永井さんは本書でこのように述べている。「手擦れた言葉は思いがけないほど虚偽の衣装を纏っていることが多い…明治を語る言葉は、まだ衣装を剥ぎとられていない…まず言葉の皮を剥ぐことから始めよう」と。このような姿勢で書かれたから、岩倉が新によみがえったのである。永井さんはかつての虚偽に満ち満ちた皇国史観を批判しているのではなく、現代の明治維新史の記述に疑問を呈しているのである。この指摘は重くかつ正しい。明治維新を語る言葉のなかで「虚偽の衣装を纏った言葉」の代表が「攘夷」と「討幕」である。TVや小説などのメディアばかりではなく研究者の文章にまで氾濫しているこの言葉が、当時どのような意味で用いられていたのか、実は十分な検証がなされず安易に用いられてきたのだ。

攘夷論のリーダー格だった長州藩首脳部の一人周布政之助は「攘夷、而して後、国を開くべし」と発言している。これは安政五年に諸国と結んだ通商条約（不平等条約）を改め、その上で対等な条約を結び真の開国をするべきだ、という主張で、理想とするのは通商条約の全面破棄であるが、それが出来なければ不平等な条約関係を改めるという、近代の言葉で言えば条約改正論であった（史料では「破約攘夷」と表現される）。すなわち極端な排外運動は少数で、攘夷運動の本流は、条約改正運動であり、真の開国・独立をめざす運動だったのである。また坂本龍馬の



同志中岡慎太郎は、アメリカは独立戦争でイギリスを相手に「攘夷」を行ったと評していた。イギリスの圧力に抵抗し、真の独立を勝ち得ることも「攘夷」だったのである。このように幕末の「攘夷」という言葉は、様々な意味をこめて用いられているのであり、決して排外思想を表現した言葉ではなかったのだ。

「討幕」もまた然り。「薩長討幕派」という言葉があふれているが、慶応3年8月に西郷隆盛は長州藩の柏村数馬に、薩摩は幕府を倒して新政府を創設し新国家の樹立をめざして行動すると、計画を告げてはいるが「討幕」はしないと明言していた。出兵協力を求めに山口まで出向いた大久保利通も、長州藩首脳部に「討幕」のためだとは言わなかった。「討幕」とは、幕府の罪を掲げ、大義名分をかざして、武力を行使して幕府を亡ぼす行為である。人々の幕府批判は、不平等条約を結び長州征討を強行して、政治的・社会的混乱をまねき人民を苦境におとし入れた、という点にあったが、これを「討幕」にあたいる罪とすることは出来なかったのである。なぜなら孝明天皇は慶応元年に条約を勅許し、長州征討も勅許していた。幕府の罪は天皇の罪でもあったのだ。罪を掲げることが出来なければ「討幕」は不可能だ。そしてなによりも西郷や大久保は、幕府を倒すことが主要な課題だったのではなく、新政府・新国家をつくるのが最大の目標だったのである。

研究費は潤沢とはいえなかったが、時間はたっぷりあった人文科学研究所で、私は、使い古され手垢のついた史料にある言葉を、たんねんに洗いながら読み返し検討を加え、自分の言葉に置き換えていく作業を続けた。その結果、退職を目前にしてようやく「攘夷」や「討幕」の本来の姿が浮かび上がってきたのである。永井さんの発言に勇気もらって、論文を書き始めているが、この一文はその一端を記したものである。歴史の海山のあいだに分け入ってゆく私の旅は、まだ終わっていない。

（ささき すぐる 平成16年退職 元人文科学研究所教授、専門は明治維新史）

## 洛書

## インドネシアおたく

岡本 正明

私はインドネシア政治を研究している。私とその研究を始めようと思ったのが学部3回生の頃であるから、かれこれ16年間近くインドネシアと付き合っている。今、確実にいえるのは、インドネシアを調査対象にして良かったとい



うことである。とんでもない経験を色々とさせてもらった。初めてのインドネシア旅行では連れ込み宿に泊まられ、バスターミナルで私の腕時計をほしがるおじさんにナイフで脅され、留学中には2回ほど路上で4人組に襲われた。深夜の小型バスに乗ったら、助手席に座らされて、血気盛んな運転手の超絶ドライブに真っ青になったかと思えば、運転手が居眠り運転をして死にかけた。20歳代前半の頃のはかわいらしかったのか、散髪屋のお兄様からは、「君の家でも散髪してあげる、そしたら全身マッサージもありよ」という別の意味で血の気が引く誘いを受けたこともあった。そうかと思えば、若くて綺麗なお嬢様にだまされて貢いだこともあった。こうした経験を味わえる確率は日本よりもインドネシアの方がはるかに高い。このことは私の研究上での経験についてもいえる。

私は政治研究をしているから、自ずと人間に関心が向かう。研究という名目(?)でいろんな種類の人間に会って話を聞いてきた。トムロコシ栽培をしている農家のおじさんの不満を聞いたり、人身売買で売られてしまったとはいえ気丈に振る舞う女性が時折見せる悲痛をすくい取ったり、化粧も含めて全身真緑の呪術師から彼の世界観を聞いたりすることもできた。有名なイスラーム指導者というのではるばる会いにいった。そうすると、彼の寄宿塾の横でたくさん売られているペットボトルの水を買って、その水に願い事を吹き込んでその指導者に渡すように言われ、会話どころではなかった。役所に行けば、生活のために汚職をする必要性を雄弁に説く

局長もいれば、汚職容疑で警察に毎週取り調べを受けて疲れ切った出納係長もいる。各地の暴力団構成員も面白い。ボスの命令で企業家を襲撃した経験を語る元幹部、ジャカルタの売春街で夜警をしているので、抗争に備えて刃渡り1メートルの刀を常備している副組長、目がうつろで麻薬常習者と思えないトップ幹部などなど。インドネシア最大の暴力団トップともなればある種の魅力もある。映画『ゴッド・ファーザー』のマーロン・ブランド並みの迫力があり彼なりの哲学もあるので、勢いに飲み込まれてその場で反論できない。

32年間続いた権威主義体制が98年に崩壊して民主化が始まったときには本当に嬉しくて、スハルト大統領辞任演説を聴いたときには鳥肌が立った。98年の頃には、スハルト体制時代に蔓延していた「汚職・癒着・縁故主義」を廃絶して「改革」(Reformasi)を実現すべきだという熱気に包まれていた。その熱気を学部生に理解してもらおうと、学生活動家たちの視点からこの98年の政変を描いたドキュメンタリーのVCDを授業で使ったりする。そして、「彼らは君たちの同世代なんだよ」と言ってみる。学部生の反応はまちまちで、だからなんだという顔の若者もいれば、素直に感動している学生もいる。

2008年現在、この熱い時代から10年が経った。インドネシアは予想以上に平穏な時代に入り、民主化が始まったときの高揚感はややない。汚職撲滅委員会が設立されて逮捕者が続出しているものの、汚職は収まる気配を見せないし、急速に進む環境破壊は止まらない。そうしたなかでは何ができるだろうか。一つめは出来るかぎり成果を今まで以上にインドネシアに還元することである。理想的にはインドネシア語で出版していき、私なりのインドネシア政治の見方や方向性をもっと提示していく必要がある。二つめは、インドネシアで長期的の展望をもって社会改革を試みている人たちとの連携である。大きなプロジェクトよりも、小さくとも地道な取り組みを具体化していきたい。やること、やりたいことはいくらかもある。

(おかもと まさあき 東南アジア研究所准教授、専門は比較政治学)



## 栄誉

### 松本 紘総長が長谷川・永田賞を受賞

このたび、松本 紘総長(名誉教授)が地球電磁気・地球惑星圏学会より、長谷川・永田賞を授与された。同賞は、宇宙科学・地球科学分野の成長を先導し、学会の発展にかかわる顕著な業績をあげた研究者に対して授与されるものである。授賞式は、10月11日仙台市で開かれた第124回地球電磁気・地球惑星圏学会の総会において行われた。



松本総長は、宇宙プラズマ物理学の研究分野において、宇宙空間中における非線形プラズマ波動現象の衛星観測や理論・計算機シミュレーションによる研究で特筆すべき成果をあげられた。特に、数多くの科学衛星におけるプラズマ波動観測を主導し、宇宙空間における静電孤立波を発見するなど、国際的に極めて高い評価を得ている。また、宇宙プラズマ計算機シミュレーションの世界的先駆者として、ホイッスラーモード波動-粒子相互作用、電子ビーム不安定性の非線形発展等の研究において顕著な成果

を挙げるとともに、「宇宙空間シミュレーション国際学校」を設立され、当時まだ新興であったこの研究分野の発展と人材育成に多大なる貢献をされた。さらに、宇宙利用として、宇宙で得られる太陽エネルギーを電波で地上に送電する「宇宙太陽発電衛星」の研究にも取り組まれ世界をリードしてこられた。一方、国際電波科学連合会長等を歴任され、国際的に指導力を発揮されるとともに、日本学術会議電波科学研究連絡委員会委員長として学術の振興にもご尽力された。また、地球電磁気・地球惑星圏学会においても、第二十期会長として学会の発展にも多大な貢献をされた。

今回の賞は、これら松本総長の国際的第一線の研究業績および学術振興、人材育成、そして学会の発展への多大な貢献に対して贈られたものである。



(生存圏研究所)

### 齋藤 烈京都大学名誉教授が2008年APA Awardを受賞

このたび、齋藤 烈京都大学名誉教授(現日本大学工学部教授)はアジアオセアニア光化学連合(APA)から2008年 APA Award を受賞された。授与式は、11月2日に北京で開かれた第5回 APA 総会で行われた。



APA Award は世界の光科学の分野で卓越した業績をあげた研究者に3年に一度贈られる賞であり、

今回が2回目で、日本人としては、藤嶋 昭東京大学特別名誉教授に続いて二人目の受賞となる。同氏の研究業績「生体分子の光化学に関する先駆的研究とゲノム化学への応用」に対して与えられた。とりわけ、光によるDNA損傷の機構解明、DNAを渡る光電子移動の先駆的研究、光を用いる遺伝子操作法の開発、蛍光性核酸塩基を用いる画期的な遺伝子検出法の開発など、光を用いるゲノム化学の研究で世界を先導する研究業績が評価された。

(大学院工学研究科)

## 益川敏英名誉教授、伊藤 清名誉教授が文化勲章を受章

益川敏英名誉教授及び伊藤 清名誉教授は平成20年度文化勲章を受章され、去る11月3日(月)、皇居・宮殿「松の間」において親授式が行われました。以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

益川敏英名誉教授は、昭和37年3月名古屋大学理学部を卒業後、同大学大学院理学研究科に進み、同42年3月博士課程を修了して理学博士の学位を授与された。同年4月名古屋大学理学部に教務職員として就職、同年7月同助手、同45年5月京都大学理学部助手、同51年4月東京大学原子核研究所助教授を経て、同55年4月京都大学基礎物理学研究所教授に就任された。その後、平成2年11月理学部教授、同7年4月大学院理学研究科教授を経て、同9年1月再び基礎物理学研究所教授(素粒子論研究部門担当)に就任、同15年3月に停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、平成7年12月から1年間、学生部長、留学生センター長、体育指導センター所長を併任、さらに、同9年4月からは3期6年にわたり基礎物理学研究所長を務められ、全国共同利用研究所としての円滑な運営と研究活動の推進に尽力された。また、評議員としても本学の管理運営に参画、大学行政に多大な貢献をされた。停年退官後は、京都産業大学理学部の教授に就任され現在に至っている。

同名誉教授は、多年にわたり、素粒子理論の研究に努め、多くの優れた業績をあげられた。中でも、昭和48年に小林 誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授(当時京都大学理学部助手)と共に提唱された「小林・益川理論」は、自然界における粒子と反粒子の間の対称性－CP対称性－の小さな破れを、当時最新の電・弱相互作用の場の理論の中で説明するもので、そのメカニズムが働くためには、当時は3種類しか知られていなかった物質を構成する基本粒子のクォークが少なくとも6種類なければならないと



予言された。その後実験によって6種類すべてのクォークが確認され、平成14年には、この「CP対称性の破れ」の現象を裏付ける実験結果が高エネルギー加速器研究機構と米国スタンフォード線形加速器センターから報告された。「小林・益川理論」は、今日の素粒子の「標準理論」と呼ばれている理論の成立に欠くべからざる役割を果たし、素粒子物理学、宇宙物理学の多くの研究分野の発展に極めて大きな影響を与え、世界的に高い評価を受けた。これらの業績に対して、益川名誉教授は、昭和54年に仁科記念賞、同60年に米国物理学会 J.J.Sakurai 賞及び日本学士院賞、平成7年に朝日賞及び中日文化賞を受賞され、同13年には文化功労者として顕彰された。さらに、同19年には欧州物理学会高エネルギー・素粒子物理学賞を、そして同20年にはノーベル物理学賞を受賞された。

これらの研究・教育活動に加え、同名誉教授は内閣府総合科学技術会議専門委員(日本学術会議の在り方に関する専門調査会)、科学技術・学術審議会専門委員(学術分科会国立大学附置研究所等特別委員会)、高エネルギー加速器研究機構評議員、東京大学宇宙線研究所協議員、東京大学物性研究所協議員等を歴任し、また、湯川秀樹博士創刊の国際的学術誌「Progress of Theoretical Physics」の編集委員及び理論物理学刊行会評議員・理事としてその編集発行に永年力を尽くし、さらに日本物理学会会員として、わが国の学術全般の振興と発展に大きな役割を果たしてこられた。

基礎物理学研究所としては、湯川秀樹博士(昭和18年)、西島和彦博士(平成15年)に次いで3人目の喜ばしい受賞である。

(基礎物理学研究所)

伊藤 清名誉教授は、大正4年三重県生れ、昭和13年に東京帝国大学を卒業、内閣統計局統計官等を経て、同18年に名古屋帝国大学助教授、同27年に京都大学教授となり、同51年から同54年まで数理解析研究所所長を務められた。この間、米国プリンストン高等研究所研究員(昭和29年－同31年)、スタンフォード大学教授(同36年－同39年)、デンマーク国オルフス大学教授(同41年－同44年)、米国コーネル大学教授(同44年－同50年)を歴任され、同54年停年退官後、同60年まで学習院大学教授、その後同61年夏までの1年間は米国ミネソタ大学客員教授として教育研究に従事された。

同名誉教授は昭和17年に確率微分方程式論を創始され、この理論は現在、確率解析と呼ばれるようになった数学分野に発展するとともに、工学、物理学、生物学などに留まらず、経済学に至るまで広範な分野で応用され、20世紀における最大の「数学的革新」の一つ(2006年第1回ガウス賞受賞理由)として世界的に高く評価されている。昭和53年に学士院賞・恩賜賞を受賞、平成15年に文化功労者に選ばれたほか、



朝日賞(昭和52年)、藤原賞(同60年)、ウルフ賞(同62年)、京都賞(平成10年)を受賞された。また、平成3年に学士院会員、同元年にフランス学士院外国人会員、同10年にアメリカ科学アカデミー外国人会員に選ばれ、昭和56年パリ第6大学、同62年チューリッヒ工科大学、平成4年ウォーリック大学より名誉博士号を授与された。

さらに、同名誉教授は昭和54年から3年間、社団法人日本数学会の理事長を務められ、また、編集委員長として日本数学会編集『数学辞典』第3版(岩波書店1985)および同英訳第2版(MIT Press 1987)を出版されるなど、教育研究に留まらず、大きな社会貢献もされている。

なお、同名誉教授はご高齢のため親授式は欠席されたが、去る11月6日(木)、磯田文雄文部科学省研究振興局長が来所して文化勲章伝達式が執り行われ、ご長女児島計子様が代理で受章、磯田局長および藤井信孝理事・副学長より祝辞を賜った。伝達式後、同名誉教授は病院にて勲章を頸にかけられ、笑顔で喜びを表されたとのことである。

(数理解析研究所)

## 西田龍雄名誉教授、長尾 真名誉教授(元総長)が文化功労者に選ばれる

西田龍雄名誉教授、長尾 真名誉教授(元総長)が平成20年度文化功労者に選ばれました。以下に両名誉教授の略歴、業績等をご紹介します。

西田龍雄名誉教授は、昭和26年京都大学文学部を卒業、同31年に同大学院を退学された。その後、同33年7月京都大学文学部助教授に就任され、同47年2月に教授に昇任された。また同



51年1月から2年間評議員、同53年1月から1年間文学部長、同61年から平成4年3月の停年退官まで附属図書館長を務められた。同4年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられ、その後文部省学術情報センター教授兼副所長を同6年3月まで務められた。さらに学外では日本言語学会会長、日本学術会議会



員、国際言語学者常設委員会執行委員などの要職を歴任され、学会の発展に多大の貢献をされた。

同名誉教授は、チベット・ビルマ系諸言語の歴史比較言語学を専門とし、数多くの優れた業績をあげられた。その研究は個々の言語の記述研究から比較研究にいたるまで、またフィールド調査から話し手のいない文献言語にいたるまで、きわめて多岐にわたるが、特に西夏語研究において比類のない研究成果を発表されている。西夏語は11世紀の初頭から13世紀にかけて中国の西北部にあった西夏王国の言語で、漢字を模倣した西夏文字によって書かれている。この文字と言語は大量の西夏文献が発見されたにもかかわらず、長らく未解読のままであった。西田名誉教授は、昭和30年代はじめに西夏文字の解読と西夏語の復元方法を提出し、科学性に裏づけられた体系的な解読への可能性を示した。その後、西夏語韻書や字書あるいは仏典などを駆使して、文字システムを存分に解読し、未知であった言語の体系を復元することに成功した。その成果は『西夏語の研究』I, II(昭和39年, 41年)に示されているが、そこでは西夏文字解読の方法、解読の過程、そして解読の結果

が詳細に記述されている。このような文字解読は、言語学における偉業として評価されるべき研究である。現在、西夏語研究は進展し、ロシアの学者も中国の学者も残された西夏語文献の研究に取り組んでいるが、上記の著作が発点になっており、同名誉教授が西夏学の先駆者と呼ばれる所以もよく理解できる。同名誉教授の西夏語研究は、その後も数々の著作によって展開されているが、『西夏文華嚴経』I, II, III(昭和50-52年)、『西夏王国の言語と文化』(平成9年)はその代表的なものである。

これらの業績に対して、昭和34年に日本学士院賞、同43年に日本学士院賞恩賜賞、平成4年に大同生命地域研究賞、同6年に朝日賞、同17年に京都府文化賞特別功労賞を授与された。また同11年には日本学士院会員に選出され、同15年には瑞宝重光章を受章されている。

この度、西夏語を中心とするチベット・ビルマ語歴史比較言語学における輝かしい功績が評価され、文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院文学研究科)

長尾 真名誉教授(元総長)は、昭和36年京都大学大学院工学研究科修士課程電子工学専攻を修了後、ただちに京都大学工学部助手に採用され、講師、助教授を経て、同48年教授に昇任され、有線通信工学講座を担当された。その後、平成8年の改組により大学院工学研究科電子通信工学専攻通信情報工学講座言語メディア工学分野担任となられた。また、昭和61年より平成2年まで大型計算機センター長、同4年より同6年まで評議員、同7年より同9年まで附属図書館長、同8年より同9年まで総長特別補佐、同9年4月より工学研究科



長および工学部長を務められた。同9年12月、第23代京都大学総長に就任され、総長在任中に桂キャンパスを開かれ、学外では国立大学協会会長として国立大学法人化の難局を切り開かれた。同15年12月、総長の任期満了により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。同16年からは独立行政法人情報通信研究機構理事長、同19年からは国立国会図書館長として活躍されている。

同名誉教授は、画像および言語という情報メディアを用いた知的な情報処理に関する研究に力を注ぎ、パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳、電子図書館の分野において優れた研究業績を挙げ、国内はもとより国際的にも極めて高い評価を得ている。

パターン認識の分野では、オートマトンモデルを用いた手書き文字の認識方式を提案し、この方式は初期の郵便番号の自動読み取り装置に使われ、その実用的有効性が示された。画像処理の分野では、世界に先駆けて画像処理にフィードバック解析機構を導入し顔画像の認識を行うとともに、リモートセンシング画像などの複雑な自然画像の解析に黑板モデルを導入するなど、人工知能的手法による画像処理の分野を開拓し、国際的に大きな影響を与えた。

自然言語処理の分野では、日本語の形態素解析法、重要語抽出法、電子辞書などの研究を行い、そこで先生が考案された様々なアルゴリズムを基にして、現在日常的に使われている日本語ワープロや文献検索システムなど多種多様な文書処理システムが開発されている。機械翻訳の分野では、昭和57年から4年間科学技術庁の機械翻訳プロジェクトを推進し、科学技術論文の抄録の日英および英日翻訳システムを完成させた。また、アナロジーによる機械翻訳という新たな翻訳方式を提案され、今日この考え方を取り入れた研究開発が世界の各所で行われている。

さらに、パターン認識、画像処理、自然言語処理、機械翻訳研究で得られた成果の上に立ち、マルチメディア情報処理、デジタル通信機能を包含した総合的情報処理システム研究として、電子図書館研究を行われ、Ariadne と称する電子図書館システムを開発された。

これら一連の研究業績に対して、平成5年 IEEE Emanuel R. Piore 賞、同9年紫綬褒章、同15年国際計算言語学会 Lifetime Achievement Award、同17年日本国際賞を受賞されている。さらに、言語処理学会初代会長、認知科学会会長、情報処理学会会長、電子情報通信学会会長、国際パターン認識連盟副会長、機械翻訳国際連盟初代会長など多くの学会における要職を歴任されるとともに、多数の国際会議を主催、運営されてきた。

以上のように、同名誉教授の研究者、教育者としての多大なる功績が評価され、文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院工学研究科)

## 日誌 2008.10.1 ~ 10.30

10月1日 シニアキャンパス 2008(～3日)  
2日 総長就任式  
8日 KUINS 利用負担金検討委員会  
9日 第11回京都大学国際シンポジウム(～11日)  
14日 総長交代式  
15日 国際交流委員会

17日 学生部委員会  
21日 部局長会議  
28日 教育研究評議会  
〃 役員会  
30日 財務委員会(第7回)  
31日 稲盛財団記念館竣工披露会

## 話題

## 京都大学、ミシガン大学、フライブルグ大学による MicRO アライアンス会議を開催

去る10月9日(木),10日(金), ミシガン大学において, 京都大学, ミシガン大学, フライブルグ大学の3大学による MicRO アライアンス会議が開催された。京都大学工学研究科を含む3大学は, 微小電気機械システム (MEMS: Micro Electro Mechanical System) に関する学術協力をベースに関係を強化してきた。現在は3大学の関連する部局でトライアングルな協定も締結している。MEMSに関連したこの3大学の関係は2004年にスタートし, MicRO アライアンス会議は, 第1回目は2004年に京都においてアライアンスの結成記念会議として開催され, その後3大学において交替で催されている。今回は5回目の開催となり, ミシガン大学の主催であった。

会議はミシガン大学工学研究科長の Prof. David



集合写真

Munson の挨拶で始まり, 各大学からそれぞれの特徴的な約30件の研究成果が発表され, 活発なディスカッションが行われた。このような3カ国の関係は, 工学研究科からの支援無しでは成り立たなかった。本 MicRO アライアンス会議についても機械系での21世紀 COE プログラム (『動的機械機能システムの数理システムと設計論』2003年度~2007年度) の支援のもとに回を重ねてきた。今回は電気系の GCOE プログラム (『光・電子理工学の教育研究拠点形成』2007年度~) からの支援があった。海外と連携した研究・教育は今後の京都大学にとっても常に求められていくものである。今後もこのような機会を有効に利用し, 各国大学との協調した学術関係を構築していく予定である。

(大学院工学研究科)



ミシガン大学工学研究科長 Prof. David Munson の挨拶

## 宇治キャンパス公開2008を開催

今年で12回目となる「京都大学宇治キャンパス公開2008」が10月18日(土), 19日(日)に開催された。晴天にも恵まれ, 宇治キャンパス会場及び宇治川オープンラボラトリー会場合わせて, 2日間で1,000名以上の参加者があった。

今年のキャンパス公開の統一テーマは「宇治キャン

パスからのメッセージ-未来を拓くみんなの科学-」で, 「社会の持続的発展」に貢献するために宇治キャンパスでは, どんな研究活動を行っているか一般市民に広く知ってもらい, 研究者と同じ立場になって科学の魅力について考えてもらうことを目的とした。



18日午前の公開講演会は、「量子ビームが誘(いざな)う未来の世界」(工学研究科原子核工学専攻伊藤秋男教授)、「太陽光発電の将来展望」(エネルギー理工学研究所佐川 尚准教授)、「京都大学の新しい宇宙への窓口ー宇宙総合学研究ユニットー」(生存圏研究所山川 宏教授)と題して行われた。

また、2日間を通して、総合展示では、各研究所・研究科・センターの紹介が行われ、特別展示では、これまでの宇治キャンパスの歴史を写真で紹介した。公開ラボでは、各研究所の大型実験施設や実験室を公開し、体験学習を実施、楽しみながら先端科学の研究に触れた。

参加者からは、「最前線の科学研究の状況も理解でき興味深かった」、「地域に研究拠点があることの利



低温の世界を見てみよう(公開ラボ)

点を実感した」、「案内係、説明者の対応が大変親切で、来年も参加したいと思う」との感想が寄せられた。  
(宇治地区事務部)

## JSPS-MOE 拠点大学交流事業「都市環境」日中合同会議の開催

工学研究科で実施されている JSPS 拠点大学交流事業に関連し、10月23日(木)、24日(金)の2日間にわたり、「第16回 JSPS 拠点大学交流事業『都市環境』日中合同会議」が中国の西安建築科技大学(Xi'an University of Architecture and Technology)において開催された。

本事業は、物質文明社会における公害問題の解決のみならず人の行動規範として省資源・省エネルギーを強く意識した、自然との共生を目指す資源循環型社会の構築を目的としているもので、平成13年度より開始され、今年度で8年目を迎えた。今回の会議では「都市水環境制御・管理」及び「都市基盤施設の管理・制御」の2つのテーマの下、活発な議論が行われた。



西安建築科技大学の  
王副学長による挨拶

今回のセミナーには大寫幸一郎工学研究科長も参加し、セミナー開催に尽力いただいた西安建築科技大学の副学長である王曉昌教

授、中国側拠点である清華大学の黄霞教授らと今後の学術的な交流を続けていく意志を確認し合った。また、西安市は京都市との姉妹都市でもあり、西安市の市政委員会張理副主任よりご挨拶をいただいた。

今後も工学研究科では、このような国際交流事業を通じ、多くの学術成果を挙げていくとともに、途上国等の環境問題解決という観点から、国際社会への貢献を進めていく予定である。



西安建築科技大学前での記念撮影

(大学院工学研究科)

## 国際交流会館修学院本館「入居者懇親会」を開催

10月24日(金)、国際交流会館修学院本館2階ホールで、入居者懇親会が開催された。

この懇親会は、修学院本館主事主催として、入居中の外国人研究者及び留学生と自治会や小学校等の地元関係者、会館で日本語教室等文化交流のボランティア活動を行っていただいている方々をお招きし、約150人の参加者で親しく行われた。

懇親会は、横山俊夫国際交流推進機構長の挨拶、塩田浩平理事・副学長による乾杯で始まった。途中、居住者によるスピーチや歌唱の披露もあり、言語や習慣の違いにより会話の少なかった会館入居者との相互理解を深めるとともに、地元住民等との交流を

深める絶好の機会となった。



歓談の様子

(国際交流サービスオフィス)

## 原子炉実験所「アトムサイエンスフェア2008」を開催

原子炉実験所では、10月26日(日)に「アトムサイエンスフェア2008」を開催した。このイベントは、小学生から一般の方まで、地域住民の方々に広く科学に興味を持ってもらうため、地元自治体(熊取町、泉佐野市、貝塚市)の教育委員会等の協力を得て、2002年度から継続して実施しているもので、今回が第7回目になる。

今回も受付を開始して数日で申込みが予定の50名に達したが、できるだけ多く参加してもらえるように予定人数を超えて受付を行った。

当日は、あいにく小雨が降る空模様で、足もとの悪い中、小・中学生、高校生とその付き添いの保護者を含めて多くの参加があった。

今回は、2つの実験コーナーと体験コーナーを設け、昨年と同様に参加者がすべてのコーナーを順次体験し、楽しんでもらえるようにした。それぞれのコーナーでは、多くの方が目を輝かせて実験を見守

り、驚きを体験して歓声を上げ、熱心に質問する参加者もいて、大盛況のうちに終了した。

最後に、実行委員長の三島嘉一郎教授から一人一人に修了証(アトムサイエンス博士)が手渡され、参加者は笑顔でそれを受け取っていた。今回の実験教室を通して科学に関心を持つ方が少しでも増えれば、主催者としてもこの上ない喜びである。



実験に見入る子供たち

(原子炉実験所)



## 宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは、10月28日(火)に宇治事業場衛生委員会主催による安全衛生講習会を開催した。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は土木構造物の設計入力地震動評価法に関する研究をされている本学防災研究所の澤田純男教授を講師に迎え、「京都で地震が起こると、どこがどれくらい揺れるのか」をテーマにしてご講演いただいた。

講演は平成7年に発生した兵庫県南部地震の実例紹介に始まり、地震動予測の基礎知識から京都市第3次被害想定において予測された地震動分布等についての判りやすい解説があった。講演後も活発な質疑応答が続き、盛会のうちに終了した。

宇治キャンパスの近くには黄檗断層及び宇治川断

層という活断層が存在していることもあり、会場に集まった100名を超える参加者は、身近に潜む災害に危機意識を高めた。



講演する澤田教授

(宇治地区事務部)

## 地域交流事業「伝統の出会い」を開催

国際交流センターでは、11月5日(水)、左京区民と留学生の交流を目的に、「伝統の出会いー生け花、能囃子、植治の庭に集う」を本学清風荘において開催した。



挨拶をする森 純ーセンター長

これは「左京区ー大学と地域の相互交流促進事業」として、京都市左京区の支援を受けたものである。

当日は爽やかな秋晴れの中、事前申込の抽選による区民30名と留学生等を合わせた約50名が参加した。iAT(アイアット：京都大学国際交流学生サークル)によるガイドツアーに導かれ、名勝「清風荘」での日本建築や庭園を鑑賞し、日本の伝統芸能〔能囃子：笛方(左鴻泰弘氏)・小鼓方(吉阪一郎氏)・大鼓方(河村大氏)及び生け花：未生流笹岡次期家元(笹岡隆甫

氏)〕の競演を堪能しながら交流した。

日本の伝統文化である能や生け花の楽しみ方などについて、留学生と出演者の間で質疑が交わされた。区民参加者からは「とても有意義な時間を過ごせて満足できた」、「またこのような機会を設けてほしい」などの感想が寄せられた。



生け花、能囃子の競演

(国際交流センター)



## 宇治キャンパスで消防訓練を実施

宇治キャンパスでは、11月10日(月)に、宇治市東消防署の指導のもとに消防訓練が行われた。これは宇治地区部局消防計画に基づく基本訓練で、宇治地区研究所本館北棟2階研究室からの出火を想定し、教職員、研究員、学生による119番通報連絡、消火器と屋内消火栓を模擬使用した初期消火、避難誘導など基本初動訓練を行った。

避難訓練には多くの教職員、研究員、学生が積極的に参加した。宇治市東消防署予防指導課長の永野和博氏から、宇治キャンパスは、本館耐震改修工事に伴い電気配線が以前と変更されている可能性があるため、災害発生時に備え実験器具等のコードや配線の再確認・点検を行い防火意識を高めるよう講評があった。

引き続き、学生等約20人が消火器操作訓練を行った後、宇治市東消防署員からスライドや映像を交え



宇治市東消防署予防指導課長永野和博氏から  
講評を受ける参加者

た解りやすい解説で、火災の際の避難経路、緊急連絡体制等の再確認といった危機管理体制の見直しの必要性についての防火講演があり、受講者は真剣な面持ちで講演に耳を傾けていた。

(宇治地区事務部)

## 国際交流会館おうばく分館で消防訓練、安全講話を実施

11月15日(土)、国際交流会館おうばく分館入居者を対象に、地震・火災発生時の緊急避難訓練と消火活動模擬体験を実施した。訓練は、宇治市東消防署員の厳しい指導の下行われた。

参加した外国人研究者や留学生は、非常ベルが鳴動し、けが人や逃げ遅れた者も想定した迫真の避難訓練に、万一の場合は自分の身は自分自身で守る意識と火災予防への日頃の心掛けについて認識を新たにした。また、消火器や自衛消防設備を使っでの消火・放水体験も行われ、天井まで炎が上がり猛煙が発生している状況を想定し、消火ホースの持ち方や使い方について、消防署員から指導を受けた。

訓練終了後、宇治警察署交通課と生活安全課の係官から、日本の交通ルール、特に自転車の乗り方を中心とした交通安全全般についての解説と、防犯等についての注意事項についての講話があり、留学生による通訳を交えての質疑応答が活発に行われた。

講話終了後は、国際交流を活動目的とする学生団体 KIXS のメンバーが協力して、中庭で焼き芋大会を開催し、日が暮れるまで入居者同士の歓談の輪が広がった。

なお、国際交流会館修学院本館においても同様に、1月中頃に消防訓練と安全講話を実施する予定である。



消火訓練の様子

(国際交流サービスオフィス)

## 訃報

このたび、中島暢太郎<sup>なかじまちょうたろう</sup>名誉教授、大浦幸男<sup>おおauraゆきお</sup>名誉教授、川村登<sup>かわむらのぼる</sup>名誉教授、森山徐一郎<sup>もりやまじゅいちろう</sup>名誉教授、伊藤清<sup>いとうきよし</sup>名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介しします。

## 中島 暢太郎 名誉教授



中島暢太郎先生は、3月14日逝去された。享年85歳。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学理学部地球物理学科を卒業後、同大学同学部副手および助手を経て、同27年同大学講師に就任され、同33年4月気象庁に出向し予報官の任務に従事した後、同41年4月京都大学防災研究所教授に就任された。昭和52年5月から2年間京都大学防災研究所所長および京都大学評議員を務め、同61年3月退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、気象庁に出向し気象予報業務に従事された経験から、基礎的科学と応用的科学の境界領域である防災研究の重要性を認識し、防災研究所で防災科学の発展に尽力された。特に、異常気象・気候変動研究の重要性をいち早く認識し、わが国のこの分野での研究における先駆的役割を果たし、また災害気候学という新たな学問分野を開拓された。とりわ

け、先生が実施されたヒマラヤやパタゴニア地域での氷河調査は、地球規模での気候変動にも大きな影響を与える山岳氷河の基本的動態を解明する先駆的な研究として高く評価されている。

さらに、東南アジア諸国における大雨の特徴などの気候学的特性や、降水量とチベット高気圧との関係などを明らかにされた。これらの業績により、昭和56年秩父宮記念学術賞や同60年日本雪氷学会功績賞を受賞された。

先生は、京都大学評議員や京都大学東南アジア研究センター協議員などを務められ、大学の管理運営にも大いに尽力された。さらに、日本気象学会理事、日本雪氷学会副会長、自然災害科学会評議員、文部省学術国際局測地学審議会委員、気象庁気象審議会委員、国土庁土砂災害対策検討会委員、国立防災科学技術センター運営委員など多くの要職を歴任された。これら一連の教育研究活動、学会活動により、平成9年4月29日勲二等瑞宝章に叙せられた。

(防災研究所)

## 大浦 幸男 名誉教授



大浦幸男先生は、10月6日逝去された。享年93歳。

先生は、昭和12年3月京都帝国大学文学部文学科を卒業、同15年3月まで同大学院文学研究科に在学し、その後公立学校教諭等を経て、同21年3月第三高等学校講師を嘱託され、同年6月同教授に就任し、同25年本学助教授(分校勤務)に補された後、同38年7月同教授に昇任、同53年退官とともに京都大学名誉教授の称号を授与された。その後ノートルダム女子大学、就実女子大学(現就実大学)教授を歴任された。

先生の本学(第三高等学校)における教官歴は32年の永きにわたり、その間、第三高等学校及び教養部において、英語・英語実習・英文学の授業を行い、文学部及び大学院文学研究科においては英文学の講義及び研究指導を担当し、多くの後進を育成するな

ど、専門教育に貢献した。

研究面においては、英米現代詩人に対する造詣が深く、特にアイルランド詩人 W.B. イェイツ研究では優れた業績を挙げられた。著書にイェイツ後期の詩を詳細に論じた日本初の研究書である『弧塔の詩人イェイツ』(昭和37年)、詩人をめぐる人間関係から創作の秘密を解明した『イェイツをめぐる女性たち』(同62年)があり、その他イェイツ作品の評論、翻訳も多い。

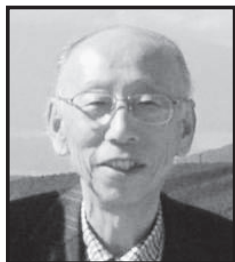
日本イェイツ協会会長(昭和53-61年)、日本フェノロサ協会会長(同55-61年)などを務めて東西文化の交流にも尽力され、その功績を称えて昭和62年にはアイルランドの最高学府トリニティ・カレッジより名誉文学博士号、平成元年には勲三等旭日中綬章を授けられている。

酒と人を愛され、その悠揚として迫らざる人となりのゆえに多くの人から慕われた学者であった。

(大学院人間・環境学研究科)



## 川村 登 名誉教授



川村 登先生は、10月23日逝去された。享年84歳。

先生は、昭和22年京都帝国大学農学部農林工学科を卒業、同大学大学院博士前期課程に特別研究生として入学、同27年同大学院博士後期課程修了後、京都大学農学部助手、大阪府立浪速大学助教授を経て、同39年京都大学教授に就任、農用作業機械学講座を担当された。昭和62年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和57年から同59年まで評議員として、大学の運営に

貢献された。

先生は農業機械学、中でも耕うんと農業機械への自動制御の応用に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、農業機械化の発展に多大の貢献をされた。主な著書に「農作業機械学」、「農業機械学」等がある。

また、農業機械学会、エネルギー・資源学会などにおいて、会長、理事、支部長等の要職を歴任された。これらの一連の研究教育活動、学会活動により、平成14年5月勲三等旭日中綬章に叙せられた。

(大学院農学研究科)

## 森山 徐一郎 名誉教授



森山徐一郎先生は、11月10日逝去された。享年90歳。

先生は、昭和16年12月京都帝国大学工学部採鉱冶金学科を卒業され、同講師、海軍技術士官を経て、同22年2月京都大学助教授、同37年4月に同教授冶金学教室非鉄冶金学講座担任に任ぜられた。昭和56年4月に停年により退職し、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生はこの間、日本鉱業会理事、日本金属学会評議員、日本学術振興会非鉄冶金第69委員会委員長を歴任され、科学技術長官賞(昭和44年)、日本金属学会谷川・ハリス賞(同45年)などを受賞されている。

昭和20年代におけるチタン製錬に関する研究については、先生は昭和25年に日本で初めて鉱石から金属チタンの抽出に成功し、今日のわが国におけるチ

タン産業の礎を築かれた。研究資材の窮乏の時代に、高温で塩素ガスを使用する過酷な冶金実験の日々を重ねられた進取の気概は、後進に大きな勇気を与えた。

現在、レアメタルは代替の利かない工業用材料として重きを成しているが、チタンのみならず、原子力用材料のジルコニウム、電子関連材料のシリコン、ニオブ、タンタルなどの製錬についても、先生は戦後の早くから研究に踏み出されたことは、今日の発展の基礎となる先駆的な業績として高く評価されている。

また、冶金反応の基礎となる高温化学熱力学の発展にも情熱を注がれ、真空技術、高温冶金技術、電気化学的測定法の開発などにより、莫大な平衡論的熱力学データの測定結果を世界に提供された。

(大学院工学研究科)

## 伊藤 清 名誉教授

伊藤 清先生は、11月10日逝去された。享年93歳。11月6日に文部科学省研究振興局長よりご家族に文化勲章が伝達されてから僅か4日後のことであった。

ご療養中の病院において先生は勲章を頸に下げられ、笑顔で喜びを表されたと伺い、受章に際して出されたそのお言葉通り「喜びを分かち合って」いた最中の訃報であった。

12月7日(日)午後、百周年時計台記念館において開催された伊藤先生追悼記念行事の中で、数学関係者有志を発起人として「お別れの会」が執り行われ、国内外から多数の参列者があった。また、12月20日(土)午後には、数理解析研究所大講義室において伊藤 清先生追悼記念学術講演会が開催された。

本号の文化勲章受章の記事に詳細が掲載されてい



るが、先生は、大正4年三重県生れ、昭和13年に東京帝国大学を卒業後、内閣統計局統計官、名古屋帝国大学助教授を経て、同27年に京都大学教授に就任され、同51年から同54年まで数理解析研究所所長を務められた。昭和17年、戦争の暗雲漂う中で確率微分方程式論を創始された先生は、20世紀最大の数学的革新の一つと称される偉大な業績を残されるとともに、国内や欧米で多数の数学研究者を育てられ、学士院会員や社団法人日本数学会理事長として、また『数学辞典』の編集など多大な社会貢献もされた。

最後に先生の残されたメッセージを紹介する。

「数学の厳密で美しい表現が社会科学にまで応用を見出したことは喜ばしいことであります。しかし、抽象的な数学の方程式が、自然と人間の関わる現実世界に応用される時には、数学だけを研究してきた私などには測りきれない問題があるように思えてなりません。(中略)現実世界への応用にあたっては、多様で広範な分野の方々が、その高い知力と技術を結集して、地球社会の調和ある共存に寄与する場を見出されることを願っています。」

(数理解析研究所)

## お知らせ

### 第12回リカレント教育講座

#### 「『心の教育』を考える一個のあり方を大事にする関わり—」

臨床教育実践研究センターでは、毎年1回、学校教育現場等で子どもに関わる専門家を対象として、「心の教育」を考えるリカレント教育講座を開催しています。

第12回となる今年度は、「個のあり方を大事にする関わり」を全体テーマとして開催いたします。2日間の日程で行い、1日目は、不登校、学力不振など子どもたちが抱える問題について、事例検討を通して考えます。2日目には、「個のあり方を大事にする関わり」をテーマにシンポジウムを行います。

(講座日程、講師などは、募集要項参照 <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/index.html>)

参加者の皆様とともに、広い視野から子どもたちの心や教育についてじっくりと考える機会にしたいと願っております。

1. 日 時：平成21年2月13日(金)13:00～17:00、14日(土)9:15～12:15
2. 場 所：京大会館
3. 定 員：100名(先着順)
4. 受 講 資 格：学校教育関係者および心理臨床専門家(事例に関する守秘義務を守れる方)。詳しくは、募集要項参照。
5. 受 講 料：6,200円(消費税を含む)
6. 申 込 方 法：郵送のみ。申込書に必要事項を記入し、ハガキ(住所・氏名を明記)を添えて、下記までお申し込みください。申込書記入の方法など、詳しくは、募集要項を参照してください。  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学大学院教育学研究科総務掛「リカレント教育講座」係宛
7. 申 込 締 切：平成20年12月末日
8. 問い合わせ先：京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター  
TEL：075-753-3052 FAX：075-753-3018  
URL：<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/index.html>

(大学院教育学研究科)

## 隔地施設 紹介



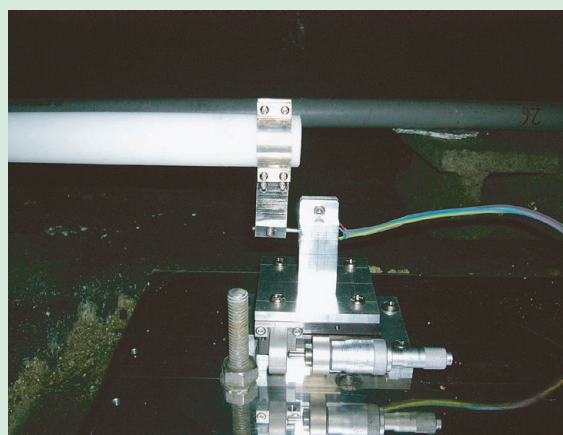
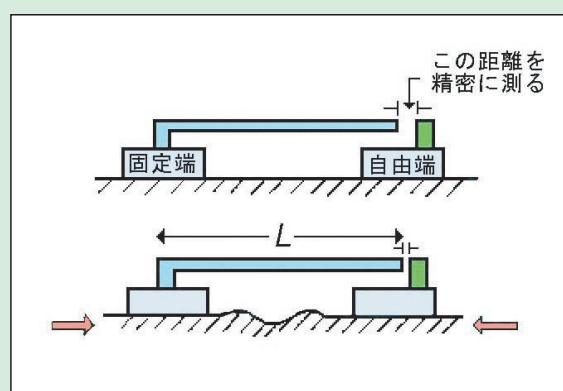
### 防災研究所 附属地震予知研究センター 逢坂山観測所

(<http://www.rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp/main/obs/osk/oskJ.html>)

逢坂山観測所は、京都府と滋賀県の府県境を滋賀県側に少し下った、国道161号線沿いにあります。観測坑道は、東海道本線の旧逢坂山隧道を借用しています。この隧道は、1878年から1880年にかけて日本人だけの手によって掘削された日本最初の山岳隧道で、現在は鉄道記念物となっています。近くには平安時代以降たびたび和歌に詠まれたことで有名な「逢坂の関跡」があり、また、百人一首で有名な蟬丸法師を祭る蟬丸神社や関清水跡等の名所旧跡が多数あります。国道沿いに位置するにもかかわらず、観測所の敷地内には野生動物も出没します。これまでに見かけたものでは、猪・鹿・狸・雉などがいます。クマさんだけは現れないことを願っています。

当観測所は、1970年に地震予知研究を目的として設立されました。現在、長さ670mの主坑道(旧逢坂山隧道)とそれに交差する2本の分岐坑道(観測所設立時に掘削)内に各種の計測装置を設置して、主として地殻変動の観

測を行っています。設置されている主な観測計器は、伸縮計3成分と地下水位計です。伸縮計は岩盤の微小な歪を測定する装置で、20~50m離れた基準点間の距離の変化を精密に測る装置です。測定できる距離変化の最小値は凡そ1nm(100万分の1mm)、最大値は1mmです。従って、伸縮計が検出できる岩盤の歪変化量は1000億分の1の桁から10万分の1の桁になります。(歪は、長さ変化÷元の長さ、で表されます。)地下水位計は、観測坑道の床面から更に20m岩盤を掘り抜いた井戸の水位を計測する装置で、周辺岩盤内



伸縮計の概念図(上)と伸縮計の変位センサー部分(下)。白いパイプは基準尺として使用している熔融石英管。

の水圧の変化を測定する装置です。井戸の水位は、通常1日に約1 cm 程上下しながら、1年間では1 m近い増減を示します。地下水位の変化は、主として月と太陽の引力による潮汐力(日変化)と周辺の降水量(年変化)によって生じますが、稀に周辺岩盤の変形が原因と考えられる異常変動が観測されることもあります。これらのデータは観測坑道のすぐそばにある観測棟まで光ケーブルで伝送され記録されています。データの参照は、観測棟ではもちろん、通信網を介して宇治の地震予知研究センター研究棟でもほぼリアルタイムで行うことができます。逢坂山観測所は、近畿地方の主要な活断層である「花折断層」と「琵琶湖西岸断層」の直近に位置することから、断層の活動に関連した歪変化を捉えられる可能性があり、地震予知研究にとって重要なデータの取得が期待されます。

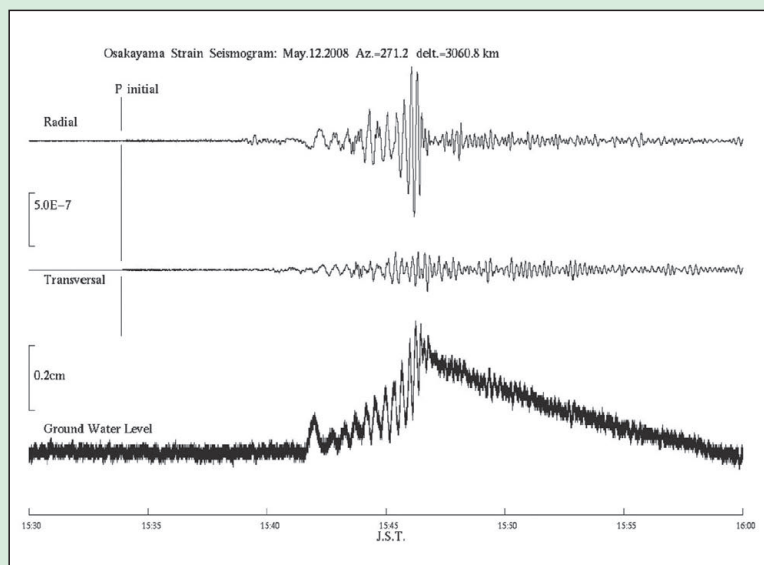
当観測所の坑道は全延長670mと長大であり、しかも坑道の中間地点は地表から約90mの深さにあるため、外気温の変化は

周囲の岩盤によって遮られ、坑道内の気温変化は年間を通して100分の1～2度程度しか有りません。この温度変化は、外気温の変化によってもたらされるものではなく、気圧変化が原因で生じることが分かっています。空気を圧縮すると温度が上がり、逆に減圧すると温度が下がることは御承知と思いますが、観測坑道は丁度巨大なピストンのようなもので、気圧の増減に伴って坑道内の気温が変化します。このメカニズムは詳しく分かっていますので、坑

道内の気温変化は気圧計の記録から1000分の1度未満の精度で求めることができます。前述の伸縮計は二つの基準点間の距離の変化を測るために、基準点間に熱膨張係数が小さい材質の棒(基準尺)を差し渡して、その一端を第1の基準点に固定し、もう一方の端と第2の基準点の間の距離を測定する仕組みになっています。基準尺の長さは温度が1度変化すると1000万分の1程度変化します。



地下水位観測用の井戸。水位は坑道床面から1～2 m上の位置にある。



2008年四川地震に際して得られた歪地震波形と水位変化。水位変化は地震波によって周辺の岩盤が変形したために生じたと考えられる。



従って、通常の外気温の下では基準尺の長さ変化のほうが岩盤の伸び縮みよりもはるかに大きくなってしまい、高精度の測定ができません。しかし、気温変化が100分の1度程度しかない観測坑道の中では、基準尺の長さ変化が10億分の1程度に抑えられますし、更に気圧計記録から求められる坑道内気温に基づいて基準尺の熱膨張による誤差を補正することによって、100億分の1未満の精度で測定ができることになり、伸縮計が持つ限界性能に近い計測が可能になります。このような高分解能の記録は、地震予知研究だけではなく、地球自由振動(大地震などが原因で、地球全体が特定の周期で振動する現象)等の微小な変動を示す現象の解明にも使用されます。

当観測所は、気温変化の少ない環境を利用して、温度変化に敏感な測定器の開発実験や検定のために利用されることもあります。地殻変動観測とは直接関係ありませんが、大変珍しい実験材料が観測坑道内に置かれています。それは、故熊谷直一名誉教授が1960年頃に始められた「花崗岩流動室内実験」に使用された花崗岩です。これは、花崗岩の石柱の両端を支持して水平に設置し、その石柱が重力によってどのように変形するかを観察する実験です。実験開始当初から30年ほどの間は本部地区に置かれていましたが、設置されていた建物が改修されることになったため、当観測所に移設されたものです。地殻変動観測も気の長い研究ですが、それをも凌ぐ大変な実験だと思います。



花崗岩流動室内実験のための花崗岩石柱。自重だけでの変形を観るためのもの(上)と、中央部に荷重を掛けているもの(下)がある。

### 職員構成

教員(兼任) 4名

### 連絡先

〒520-0054 滋賀県大津市逢坂1

TEL: 077-524-0272

### アクセス

- ・JR大津駅から徒歩10分
- ・京阪電鉄京津線上栄町から徒歩8分
- ・京都側から国道1号線を草津方面へ走り国道161号線(旧道)へ分岐してすぐの所